### **「冬を数える指」**

ねえ、知ってた？

乾いた風が吹くこの街、夜になると、空気の重さが変わるの。  
 昼間の石畳は人間たちの靴音で満ちているくせに、  
 夜になると急に冷たくなる。まるで、  
 誰かが私を見てるってわかった瞬間だけ冷える、あの感覚に似てる。

……スラムにいた頃の話よ。

五つのときに両親が死んだ。  
 死んだ、っていうより──消えた、に近いかもね。  
 血と咳と、あと、ゴミの山。あっけなかったよ。

それからは……そう、指を使って“冬”を数えるようになった。  
 ひとつ、ふたつ、みっつ……  
 手のひらのしわが汚れで濁って、指の感覚がだんだん鈍くなるたびに、  
 「ああ、今年もまた、誰にも名前を呼ばれなかった」って思い知る。

人間ってね、優しい顔してるくせに平気で踏むのよ。  
 壊れた車椅子ごと蹴られたこともあったし、  
 道端で「哀れだな」とか言いながらパンを投げつけられたこともある。  
 慈善？ 救済？ 冗談じゃない。  
 あいつらの優しさなんて、自己満足でしか動かない。

歩けなかったから、地面に這いつくばるしかなかった。  
 匂いの染みついた舗装の割れ目。  
 犬の尿と油の混じったあの感触、まだ思い出せる。

自分が「誰でもない」ってことを、あのころは毎日、実感してた。  
 読み書きなんてできるわけない。  
 名前も、音だけで覚えてた。「アミア・ブレトネメル」。  
 意味なんて、なかったよ。ただの音だもの。

それでも──飢えるのは怖かった。  
 だから自販機をいじった。電子機器に繋がって、内部のコードを書き換えた。  
 当時はまだ、「これが能力」だなんて気づいてなかった。  
 ただ、私だけにわかる“音”があった。機械は、人間よりずっと素直だった。

売ったこともあるよ、身体。  
 でもさ、それって“汚れた選択”じゃないんだ。  
 それしかなかっただけ。  
 生きるって、そういうことだと思ってた。

あの頃、私が見てた“人間”って、ほとんど“動物”だった。  
 口では正義を語りながら、  
 動けない子供に唾を吐くような連中ばかり。

何が正義よ。何が守る者よ。  
 この街には、正しさなんて一度もなかった。

八つでクリオス支社に拾われたとき──  
 ……なんていうか、救いだなんて思わなかった。  
 あれは“別の形の牢獄”だったけど、  
 少なくとも、あの地面よりはマシだった。

今、私の指は七本まで“冬”を数えている。  
 数え方なんて、覚えても無意味だけどね。  
 どうせ、誰も祝ってくれやしないし。

それでも──まだ、生きてる。  
 ほら、皮肉なもんでしょ？  
 人間が嫌いな私が、人間の世界でまだ生きてるなんて。

ねえ、笑えるでしょう？